

Contents

- 03 | 特集1 | シャープ株式会社 沖津社長 記念講演/
沖津社長×吉本学長対談
- 07 | 特集2 | フェローシッププログラムについて
- 09 | 教育NOW | 授業紹介「機械製図法ⅠA」
- 11 | 研究室探訪1 | 材料化学系 中西英行 教授
- 13 | 研究室探訪2 | デザイン・建築学系 本橋弥生 准教授
- 15 | がんばる工織大生
- 16 | 活躍する卒業生
- 17 | 美術工芸資料館収蔵品紹介
- 19 | 京都工芸繊維大学基金 寄附報告
- 21 | Topics
- 25 | Information





「私の歩んだ道」

2025年5月16日、本学創立記念日事業として
シャープ株式会社 代表取締役社長 沖津雅浩氏を招き
「私の歩んだ道」と題した記念講演を実施しました。
学生時代やシャープでの歩みについて語った、
その一部をお届けします。



勉強やクラブ活動、アルバイトに 力を注いだ学生時代

皆さん、こんにちは。シャープの沖津でございます。私は45年前に、京都工芸繊維大学を卒業しました。そしてシャープで働いている45年間、大きな変化が何度も訪れ、厳しい時期も多々ありました。その経験談が少しでも皆さんの参考になればと思っています。

私は1957年に京都市左京区で生まれ、小学校・中学校・高校時代を京都の公立校で過ごしました。そして、通いやすい理系の国公立大学を進学先として検討する中で、京都工芸繊維大学の電気工学科への入学を決めました。大学時代は勉強だけでなくクラブ活動やアルバイトにも打ち込み、さまざまな友人と出会ったことが強く記憶に残っています。当時の友人とは今も交流があります。仕事と関係なく付き合える友人は、とても大切な存在です。クラブ活動はバスケットボール部に所属していました。昔は京都工芸繊維大学・信州大学・東京農工大学が三織大と呼ばれていて、この3校での大会に向けて精力的に活動していたことはいい思い出です。アルバイトは飲食

店や八百屋、餅屋、建材屋、家庭教師など幅広く経験し、現場ではどんなことをしているのか、お客さまにはどう対応しているのかを知ることができました。学生の皆さんは、機会があればいろんなアルバイトに挑戦してみてください。就職先を考える際に、その経験がきっと役に立つでしょう。

設計開発から海外拠点立ち上げまで 入社後は新たなチャレンジの連続

大学時代に温度センサを使った研究をしていた私は、就職先でも関連した仕事をしたいと考えていました。そこでシャープに入社し、エアコンの技術部門への配属願いを出したところ、希望がかないませんでした。私が入社した1980年頃は、ちょうど家電製品が大きな変化を迎えていた時期。マイコンがさまざまな家電に搭載され始めていました。そうした背景もあり、エアコンの制御基板のハード設計開発や、エアコンを制御するマイコンのソフトウェア開発といった仕事にまず取り組んでいきました。先輩も経験していない仕事だったのでアドバイスをもらうこともできず、大学時代以上に一生懸命に勉強したことを覚えています。その結

果、世界で2番目にインバータエアコンを開発するなど、会社として大きな成果を上げることができました。成功ばかりではなく、もちろん失敗もあります。新たなチャレンジの結果、品質問題を起こしてしまったことがありました。長い時間をかけてブランドを磨き上げても、たった1つの品質問題で一瞬にして価値が落ちてしまう。そのことを強く実感し、以来、品質を第一に考えることが自身の大きなテーマとなっています。

技術部門で20年経験を積んだ後、新しいことに挑戦してみたいと考え、自ら手を挙げて海外に行きました。赴任先は、タイのエアコン生産工場。そこで工場責任者を務め、もう1人の日本人スタッフと一緒に、約800名の現地社員のマネジメントを行いました。この仕事を通じて、現地メンバーに責任を持たせ、任せることの大切さを学びました。もう1つ、重要性を実感したのが人とのつながりです。生産現場で最も多かったトラブルが成型関係ですが、私はその分野は専門外で、十分な知識が備わっていませんでした。そんな時、現地の協力会社の人に相談すると問題解決がスムーズに進みました。今ではITが発達して調べものが簡単になっていますが、それでも現場を見な

いと分からないこと、現場を熟知している人でないと解決できない問題はまだまだ残っていると思います。海外では、同じ日本から来た競合メーカーの方、異業種の方との交流も深まり、さまざまな情報を得て視野が大きく広がりました。

タイにいたのは2年間で、次は中国に赴任しました。中国で空調の開発センターを設立することが新しい使命でした。人材採用から設備・機器の導入まで、すべてを現地メンバー2人と約1年間でやり切りました。人材の確保にあたっては自ら有名大学に足を運び、自分の目で採用する人を選びました。特に農村部から有名大学に來ている学生は非常にハングリー精神旺盛で、親に恩返しをしたいという気持ちが強かったことが印象に残っています。センターの設立が完了した後、私は中国生産工場に移り、その社長を務めました。着任時は赤字で社員の士気も低かったのですが、構造改革を進めて2年後に黒字化に成功しました。

今後の目標、学生へのメッセージ

6年間の中国赴任を経て、2009年に日本に帰

国してからは、ランドリー事業部長、空調事業部長、本部長を歴任しました。海外への生産移管によるコスト力の向上や海外市場の開拓を進め、売上・利益の向上に貢献しました。本部長時代には全ての白物家電事業に携わり、他社に先駆けてAIoT*対応家電を商品化。2016年にスタートして、2024年度までで1,000万台を超える機器が市場に出ています。ここから得られた利用状況などのデータを、今後のビジネスにつなげていきたいと考えています。

2016年からは、台湾の鴻海グループとの協業もスタートしました。協業の中で感じたのは、とにかくスピードが速いこと。それに対して、日本企業は意思決定に時間がかかりがちです。私たちもすぐには変わりませんが、今は常にスピードを意識して仕事をしています。また、伸びる事業にどんな投資をしていく点も非常に参考になりました。

2022年からは副社長として、20歳年下の台湾出身社長と二人三脚で経営に取り組みました。会社の業績は2年連続の赤字で苦しい日々でした。そして2024年6月に社長に就任。構造改革が実り、2024年度の決算では3年ぶりの黒字化を達成しました。シャープは今、「独創的なモノや

サービスを通じて“新しい文化”をつくる会社へ」という目標を掲げています。その実現に向けて、「目の付けどころ」「特長技術」「スピード」を強みとして、「あなたらしく暮らす」「共創的に働く」という領域で、誠意をもって人々の日常を見つめ、創意をもって新たな体験を提案していきます。

これから社会人になる皆さんに期待することが6つあります。①果敢にチャレンジする、②いつまでもスタートせずに考えるのではなく、スピードをもって走りながら修正する、③同じ過ちを2度繰り返さない、④人とのコミュニケーションを大事にし、チームを引っ張る強いリーダーシップを持つ、⑤最終顧客や現場が望むもの、喜ばれることを常に考え仕事をする、⑥グローバル視点を持つ。こうした意識を持って仕事に取り組める人は、ぜひシャープに来てほしいと思います。

*「AIoT」は、AI（人工知能）とIoT（モノのインターネット）を組み合わせ、あらゆるものをクラウドの人工知能とつなぎ、人に寄り添う存在に変えていくビジョンです。「AIoT」はシャープ株式会社の登録商標です。

企業と大学

これからの協働の

在り方を考える

視野を広く持ち、自ら動ける人材を

吉本 今回は講演を引き受けていただきありがとうございます。引き続き、対談という形でお話を伺えればと思います。

沖津 よろしくお願いたします。

吉本 よろしくお願いたします。沖津様はこれまで多様な方々と協働・協業されてきたとお話でしたが、産学連携についてはどのようにお考えですか。

沖津 大学が企業と組むことの大きなメリットとして、研究のスピードアップがあると思います。これは私の大学時代の実体験ですが、研究用のサーモスタットを買おうとした時に1万円ほどかかり、気軽には入

手できませんでした。でも、会社だと同じものを10分の1ほどのコストでスピーディに調達できたんです。調達力のある企業をうまく活用すれば、大学の研究はもっと速度を上げられるのではないのでしょうか。

吉本 そうですね。そんな仕組みができればとても効果的です。

沖津 全然違う分野だと難しいですが、似た研究をしているのであれば、産学連携の必要性は高いと思います。当社も昔は全部社内ですらやろうとしていたのですが、今はもう無理ですね。優れたところと組んで、よりよい仕事をするという方針に舵を切っています。

吉本 自分の領域にとらわれ過ぎない、そんなマインドですね。

沖津 事業領域が広がり、特定の専門分野の人だけでは仕事ができなくなってきました。これまではテレビ、白物家電、スマートフォンなど、ばらばらにやっていたところを、今はそれら領域間での横のつながりを重視しています。

吉本 なるほど。大学だと、特定の分野だけを見るようになりがちです。特に修士や博士ともなると、専門分野を深掘りして論文を書かないと、学位を得られないので。一方で、そこから飛び出す力も求められています。

沖津 論文執筆が最優先になっている人が多過ぎるようには感じます。私としては、「自分の研究が世の中の役に立ってうれしい」と思うような人が

記念講演の後、

シャープ株式会社 沖津雅浩社長と
本学 吉本昌広学長で実施した対談。

そこでは、企業と大学の連携や、
大学における人材育成などについて
活発な意見交換が行われました。

育ってほしいですね。そしてやはり、専門領域だけでなくこれからは厳しいと思います。いろんなものに興味を持って、自分から動くことが大切です。

吉本 自分から動くという意味では、修士や博士の学生は鍛えられています。専門知識があるのはもちろんとして、その上で自ら何かを企画し、必要な情報を収集し、いろいろな人と関わりを持って、結果をまとめて、ちゃんと第三者に評価してもらえるドキュメントとして論文をまとめる。その経験は大きな力になっていると思います。

沖津 その経験は大きいですね。知識・技術をもとにアイデアを考え、自分でそれを売り込む力は、今後の社会において非常に強い武器になります。ベンチャー企業の社長などはまさにそうですね。自分で開発したものの魅力を、自分の言葉で的確にお客さんに伝えている。

吉本 数年前、ある社長さんと話している時に「どんな人を育てたいんですかね?」と伺ったら、「営業ができる人」と答えられました。それと通じますね。その方も技術屋でした。ただ、その話を学内ですると、「営業ですか?」と反応はいまひとつでしたが。

沖津 営業もそうですが、「自分がやっていることをプレゼンする仕事」と言うのがいいでしょうね。

吉本 そうですね。うまく表現して、そうした人材の重要性を学内で周知していきたいと思います。

京都工芸繊維大学のこれから

吉本 沖津様は京都工芸繊維大学の出身です

が、本学についてどのような印象をお持ちですか。
沖津 現在当社には約120人の工繊大卒業生がいますが、結構ユニークなメンバーが多いように感じます。学風の影響があるんでしょうね。例えば、今、白物家電を担当しているメンバーの一人は、工学系を出ていますが、ずっと商品企画をやっている、あるドキュメンタリー番組にも取り上げられました。AIoTに長年携わり、定年後も延長して政府と一緒に仕事をしている人もいます。「オンリーワン技術」と私たちはよく言いますが、そんな「〇〇といえば工繊大」という特徴を打ち出してほしい、もっと魅力的な大学になりそうです。

吉本 特色の打ち出しは、まさに日本の大学全体のテーマです。本学の場合、「デザイン・建築分野がある理工系大学」という点が1つの特徴ですね。先ほど話題に上った「自分がやっていることをプレゼンできる技術者」の育成も、今後の特色化の方向性としてあると思います。

沖津 即戦力になるような学生が育つのであれば、私たちもいろいろ協力させてもらいます。

吉本 一度本学の教育プログラムの中身を見てもらって、協働できるポイントを探ってみたいです。
沖津 他大学とは、AIoT関連の共同プロジェクトを実施したりしています。そうした新しい領域で協力していくのがいいかもしれません。

吉本 そうですね。高度専門人材の育成を目的とした政府研究開発プロジェクトがあるのですが、そこに情報人材の育成についての提案を出しているところですね。それもきっかけにして、情報人材

の育成を強化する方向性も考えています。そこうまくはまったらいいなと思いました。

沖津 当社では、経済産業省や総務省の補助金を受けて進めている大きな研究開発プロジェクトがありますが、そこには大学も一緒に入ってもらっています。今だと、半導体産業の支援に巨額の予算が充てられていますね。そうした事業にマッチした研究を行っている大学には、私たち企業も飛びつきます。なので、それを見込んで研究を立ち上げるのも一手だと思います。

吉本 そうした目線も持って、協働の在り方を考えていきます。今回は貴重なお話をありがとうございました。今後も沖津様とは対話の場を持ち、シャープ様と京都工芸繊維大学でいい関係性を築いていけると嬉しいです。

Interviewee



沖津 雅浩
—
シャープ株式会社
代表取締役社長 CEO



吉本 昌広
—
京都工芸繊維大学
学長



これからの社会を担う 「博士人材」の育成に 全力で取り組む

新たな知を創造し、
社会に革新をもたらす存在として
重要性を増している博士人材。

本学でもその養成に力を入れています。

今回は、博士後期課程の学生と日々向き合っている
3名の先生に取り組み内容などを伺いました。

京都工芸繊維大学の フェロシッププログラムについて

高田 本学におけるフェロシッププログラムでは、学生にも企業にも魅力的な博士後期課程を念頭に、アカデミアに加え、先端的企業にも継続的に分野横断型イノベーションリーダーとなる博士人材を生み出すことを目指しています。2021年に、文部科学省の「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェロシップ創設事業」と科学技

術振興機構の「次世代研究者挑戦的研究プログラム」の2事業に本学が採択されたのが始まりです。2024年にこれらを一本化した「次世代研究者挑戦的研究プログラム (SPRING)」事業に本学の「京都産学共創による分野横断型イノベーションリーダー人材育成プログラム」が改めて採択されて、今に至ります。2025年4月時点で、38名の博士学生がフェロ生で、今までに100名近くが支援を受けています。本学のフェロシッププログラムは、当初から、「経済的支

援」と「キャリア支援」を二本柱としています。経済的支援は、年間70万円の研究費と年間180万円の研究奨励費を支給するというものです。生活のためのアルバイトなどを必要とせず、研究に専念できるようにしています。本学のプログラムで特徴的なのは、もう一方のキャリア支援です。この取り組みは、さらに「研究力向上プログラム」「キャリア支援プログラム」の2つに分けられます。

亀井 研究力向上プログラムは、垣根を横断した

研究活動に取り組んでもらうのがポイントですね。
高田 そうです。具体的な活動の場としては「dCEP」「トランスフェラブルスキルコース」「FMA (共同研究)」の3つを用意しており、フェロ生にはどれかを選んで参加してもらいます。いずれも学外や異分野の人たちと協働で取り組むプログラムです。そしてキャリア支援プログラムの方でも複数の取り組みを行っています。1つ目は定期的なメンタリングで、学生一人ひとりが自律して成長できるように、私がキャリアメンター、伴走者として個別支援をしています。研究や生活における悩みを聴いたり、キャリアに関する相談を受けたりと、メンタリングの内容はさまざまです。そして2つ目は「博士キャリアメッセKYOTO」への参加。京都・奈良の9大学8企業が参画し、本学が幹事校を務める「京都クオリアフォーラム」が主催するイベントです。その他、「社会課題を考える企業見学会」として企業を訪問し、問いを立てて議論する機会もあります。個別支援やイベントを散発的に行うのではなく、それぞれを融合させて学生をしっかりフォローしている点が本学のフェロシッププログラムの特徴です。

亀井 2024年の博士キャリアメッセKYOTOには私も参加しました。起業したり、大学の先生になったり、多様な経歴の博士人材の方々がステージに立って話をされていたのが印象に残っています。なぜ博士後期課程に進学したのか、どのようにキャリアを築いてきたのかなど、人生の分岐点について詳しく話を聴くことができました。博士の学生たちは将来に不安を抱えることもあると思いますが、この方々にさまざまな道があることを知っていれば、きっと励みになるはずです。

高田 聞こえのいい話だけでなく、苦勞した経験なども聴けるので、学生たちにはとても参考になると思います。

亀井 将来の不安を払拭して、博士後期課程の3年間を存分に研究に注ぎ、自らのテーマと深く向き合ってもらいたいですね。

森田 私もそう思います。大切なのは自分ならではのオリジナルな研究に取り組むこと。指導教員のテーマの延長線上で研究するのではなく、本当に自分がやりたいテーマを追求してほしいですね。また、夢や目標を達成しようと思うと、一定の忍耐力が必ず必要となってきます。博士後期課程に進む学生は、ぜひそのことを胸に刻んでおいてほしいと考えています。

博士人材のさらなる活躍に向けて

高田 博士に対するイメージは変わりつつありますが、まだ「変わり者が行くところ」という見方は残っているように思います。そうではないということを強く発信していきたいですね。



森田 「暗い研究室で黙々と机に向かっている」といったイメージは、日本特有の残念なステレオタイプですね。海外では博士号取得者はスーパーマンのような存在です。博士号は生半可な覚悟で取れるものではないので、日本でもそのくらい尊敬されてもいいのではと思います。

高田 私が企業に勤めていた頃、海外の企業と共同でプロジェクトを進めることがあったのですが、先方のリーダークラスのエンジニアはみんな博士号を持っていました。海外ではそれが当たり前。私も博士号を持っていたからこそ、分野や立場が違って、最初から対等に話をさせてもらえました。博士号は、それ自体が自身を証明する強力な手段になるのです。

森田 日本でそうしたイメージが定着しないのは、先生たちが学生に海外の話をしていないからかもしれませんね。学生たちは意外と食いついてくれるので、ぜひ積極的に話してみたいと思います。

高田 そうすれば、博士号の重要性をもっと実感してもらえそうですね。

森田 また、学生自身に海外経験を積ませることも大事だと考えています。私の経験上、海外の研究室で1カ月も活動すれば視点が大きく変わります。昨今重視されている「多様性」の意味も、初めて真に理解することができるでしょう。こうした国際関係の取り組みの強化は、今後のフェロシッププログラムの大きな課題です。

亀井 学内では海外研究のための奨学金を強化しようという動きもあります。ぜひ海外研究や、海外学会への参加にチャレンジしてほしいです。学会で指導を受けたい先生に出会った場合、共同指導という形で本学教員と海外教員の両方から指導を受けることもできます。共同指導を基に両大学の学位を取得できるよう、制度改革も検討中です。

学生へのメッセージ

森田 他人の目で物事を考え、他人の目を気にして

動くような人にはならないでください。自分で考えたことが実証される瞬間こそが、研究の一番の醍醐味です。自分の目で物事を追究できる方は、ぜひ博士後期課程への進学をおすすめします。

亀井 博士後期課程の3年間は経済面でも研究面でもサポートを受けられるゆりのある期間です。この時間を有効活用して物事を深く考え、頭が熱くなるような経験をしてください。深く考え抜いた人にだけ分かる感覚があります。その感覚をつかめたら、研究者になっても別の道に進んでも、素晴らしい人生を送れると思います。

高田 博士後期課程の価値は、博士号の取得という結果だけでなく、自分の好きな研究に熱中する過程にあると思います。今は支援も非常に充実しており、チャレンジしやすい環境があります。一步を踏み出すかどうか、決めるのは皆さんご自身です。進学を決意した人は、覚悟を持ってあきらめず突っ走ってください。私たちが全力で応援します。

Interviewee



森田 辰郎
副学長
(学部・大学院マネジメント担当)
工芸科学研究科長



亀井 加恵子
副学長
(学生支援・国際担当)
学生支援センター長



高田 隆裕
産学公連携推進センター
リカレント教育推進室長
特任教授
フェロシッププログラム事業
コーディネーター・
キャリアメンター



Fig.1 フェロ生による最終報告会

機械製図法IA

図面の作成 を通して 機械機構への 理解を深める



武末翔吾 准教授
[機械工学系]

【経歴】
2018年04月-
日本学術振興会 特別研究員 DC2
2019年04月-
京都工芸繊維大学 助教
2023年09月-2024年03月
University of California, Davis,
Visiting Scholar
2025年04月-
京都工芸繊維大学 准教授

教育NOW

機械製図法IA

【授業概要】

講義を通じて機械製図に関する基本的な規則を理解するとともに、演習を通じて3D CADおよび2D CADの基本操作法を実践的に学びます。

私たちの身の回りには機械や構造物の多くは、設計図、すなわち図面を元に形作られています。そんな、機械工学の土台となる図面や製図の基本を学ぶのが機械工学課程の「機械製図法IA」です。どんな授業が展開されているのか、担当の武末先生に伺いました。

機械技術者に必須の製図知識を 講義・演習の2本立てで学ぶ

機械工学課程2年次前学期の必修科目である「機械製図法IA」。毎年100名ほどの学生が受講しています。実際に授業が行われている演習室を訪れると、真剣な表情でパソコンの画面を見つめる学生たちの姿がありました。彼らを取り組んでいるのは、3D CADを用いた立体モデルの作成。レジュメとにらめっこしながら、画面上に直方体や円柱を描き出していきます。「まずはシンプルな立体を作るところから始めて、機械部品の立体モデル作成へと発展させていきます」。そう話すのは、授業の担当教員の1人である武末翔吾先生です。「この授業は、機械製図の基礎を習得してもらうことを目的としています。学期の前半には講義形式で授業を実施。製図で用いる線の種類やその正しい引き方、表面粗さの表し方、寸法の入れ方など、製図に関する知識を学んでもらいます。そして学期の後半になると、学生たちは3D CAD・2D CADを使った演習にチャレンジしていきます。教員の説明を聞いたり、実演を見たりしながら、操作方法を学んでいきます」

この授業で得られる知識・技術の大切さについて、先生はこう話してくれました。「機械工学課程の学生の多くは、将来メーカーで設計業務に携わることになります。その際に、図面を正しく読み書きできなければ、ものづくりの現場で仕事を進めることはできません。それだけ必須のスキルということです。そのため、2年次の後学期に開講される『機械製図法II』の授業も合わせて、1年間かけてじっくり理解を深めてもらうカリキュラムとしています」

CADソフトを操作するのは、ほとんどの学生が初めて。そんな彼らが着実にステップアップできるよう、丁寧な指導を心掛けていて先生は言います。「演習では教員と学生の距離が近く、質問もしやすい雰囲気があります。学生が自分から声を上げない場合でも、パソコンの画面をのぞいてみて苦戦している様子があれば、こちらから声を掛けるようにしています。また、全体の様子を見て『このあたりは分かっていないかもしれないな』と感じた時には、その場で補足を加えることも。この授業ではTA（ティーチング・アシスタント）も比較的多く配置されており、学生の理解をサポートする体制が整っています。疑問をそのままにせず、授

業中に解決できるよう工夫を凝らしながら進めています」。そうした指導の成果もあり、学生たちは授業内で大きく成長していくそうです。実際に、そんな成長ぶりを感じたというエピソードを、武末先生が教えてくれました。「ある程度学習が進んだところで『何でも好きなものを選んで、3D CADでそのモデルを作ってみよう』という課題を出しています。それに対して熱心に取り組んで、いろんなものを作ってきてくれるんです。ピアノの鍵盤から内部構造まで細かく再現してくれたり、他にはギターや自動車、文房具の立体モデルを作ってくる学生もいます」。最初は直方体や円柱を作るところからスタートした学生たち。短期間でそこまでレベルアップするとは驚きです。「最近の学生はコンピュータにある程度慣れているので、CADソフトの基本的な使い方は授業時間内でだいたい習得できることが多いですね。ただししっかりマスターするには、授業の時間だけでは足りない部分もあります。ですので、事前学習や事後学習の重要性については、授業の中でも繰り返し伝えるようにしています」

大切なのは生産現場を想像して 「伝わる図面」を書くこと

技術者としての実務に向けた、いわば第一歩となるこの授業。知識やスキルだけでなく、製図に対する心構えも教えています。「基本的には、この授業の単位を取ることが学生にとって1つの大きなゴールになります。でもそれだけで終わりではなく、この先、例えば研究室に入ったり企業に就職したりした際に、機械分野では必ず図面を使う場面が出てきます。そんな時、自分で書いた図面を元に実際にものを作るのは、自分ではなく生産現場の方々です。なので、そうした人たちが分かるように、まずは『基本的な原理原則に則った図面を書きましょう』ということをしっかり伝えていきます。線は内側から等間隔にきれいに引きましようとか、文字は小さすぎず大きすぎないようにしましようとか、そうした細かいところですね。そして、現場の方が必要とする情報をイメージし、図面に盛り込むこと。これが特に大切です。図面には『最低限入れておかないといけない数字』と、『計算すれば出てくるけれど、あらかじめ書いてあった方が生産現場の人が助かる数字』というものがあ



Fig.1——教員と学生の距離の近さを生かして、丁寧なサポートを実施



Fig.2——3D CADを使った機械部品の立体モデル作成



Fig.3——真剣に演習に取り組む学生たち

ます。現場では、工作機械の前で図面を見ながら作業することもあるわけです。そんな時、いちいち電卓を使って計算しないと必要な情報が得られない図面だと、危険につながることもあります。この授業を受けた人には、そこまで想像して図面を書けるようになってほしい。そうした思いで指導に当たっています」

【観察】がものづくりの力につながる

最後に、機械技術者としての道を歩んでいく

学生たちに向けて、武末先生にメッセージをいただきました。「機械に興味がある方であれば、製図やモデリングの力はやはり欠かせません。できれば高校生や大学1年次のうちから、身の回りの機械や構造物がどんな形状・機構をしているのか、気になってほしいんです。『この部分はなぜ回るんだろう?』とか『どうして伸び縮みするんだろう?』とか、普段あまり気に掛けない細かい仕組みに、意識的に目を向けてみてください。すると、製図やモデリングの時にその経験を思い出して、『ここはこんな形にした方がよさそう』

『こんな風に使うから、寸法はこれくらいにすべきだな』とイメージできるようになります。これはとても大きな力です。CADも同じで、意識的に少しずつ触ってみただけでも違います。毎日数分でも続けていけば、作れるものの幅がどんどん広がっていくでしょう。実物でもCADでもいいので、日々ちょっとした興味を持って自分で触ってみる。そんな姿勢が、ものづくりに関わる学生にはとても大事なだと考えています」

ナノ材料化学 研究室

金属を 液体のように扱い 新たな可能性を 引き出す



中西英行 教授
【材料化学系】

【経歴】

2007年07月-
ノースウェスタン大学 博士研究員

2010年07月-
カリフォルニア大学アーバイン校
日本学術振興会 海外特別研究員

2011年06月-
(独) 物質・材料研究機構 研究員

2012年10月-
京都工芸繊維大学 助教

2017年01月-
京都工芸繊維大学 准教授

2021年03月-
京都工芸繊維大学 教授

【研究分野】

金属ナノ結晶、高分子・繊維、
ソフトエレクトロニクス、不均一触媒、
エネルギー貯蔵デバイス

研究室探訪

ナノ材料化学 研究室

【研究概要】

金属は、熱や電気を通すだけでなく、触媒作用も示し、現代の産業に欠かすことのできない極めて重要な材料です。しかし、金属は固体であり、加工しづらい欠点があります。私たちは、常温常圧で融解する金属のナノ結晶を独自に開発し、その反応機構と応用方法について研究しています。

紀元前の時代から人類の文明発展を支えてきた「金属」。この材料のさらなる可能性を追究しているのが中西先生です。固体の金属を液体のような状態にする独自の技術を開発し、金属と高分子材料を組み合わせた新材料の開発に挑んでいます。常識を覆す、その最先端の研究内容に迫りました。

液体のような金属

生み出すカギは「ナノサイズ」

金、銀、銅、鉄、アルミニウム—。私たちの身の回りにはさまざまな金属がありますが、水銀やガリウムなどを除き、そのほとんどが常温では固体の状態です。金や銀が室温で液体のように流動する様子はイメージできません。ところがある方法を使うと、室温で金属を融かすことができるのです。その研究内容について、ナノ材料化学研究室の中西英行先生にお話を伺いました。「研究室名にある通り、『ナノ材料化学』が私の研究のテーマです。ナノ材料化学という言葉自体は私が作ったものではなく、すでに世の中に広く知られている分野です。物質というのは金属に限らずさまざまなものがありますが、サイズを小さくするだけで、巨視的な大きさの物質にはない、ユニークな性質を見せることができます。私たちが特に注目しているのが、貴金属のナノ結晶です。貴金属と聞くと、金の延べ棒のような大きな塊を想像すると思いますが、これらを数ナノメートルという非常に小さな結晶にすると、驚くべきことに、まるで液体のごとく振る舞うのです。金属原子が流体のように流動し、形状を変えていくという、面白い現象が見られます。この現象がどのように起こるのかを理解し、制御できるようになれば、室温で金属を融解・再結晶化させることが可能となります。それを違う材料の内部で引き起こしてあげれば、金属を高分子材料に組み込んでいくといった、従来は困難だった加工も実現できます」

これまでの研究で、固体から液体への変化が起こるメカニズムはどこまで分かっていたのでしょうか。中西先生は次のように話してくれました。「詳細は明かせませんが、『恐らくこうなのだろう』という結論は導き出せています。金属ナノ結晶の表面では、ある種の化学反応のようなものが起こっていることを発見しました。そしてこの『隠された反応』をうまく進めると、結晶が不安定になり、原子が流動し始めることが分かりました。今のところ、私が考えたこのメカニズムで実験結果は全て説明できており、固体から液体への転移のコントロールにも成功しています」

金属×高分子の新材料で

社会課題の解決に貢献したい

メカニズムの解明はあくまでもスタート地点。「基礎だけでも応用だけでもない、その両方がある研究を自分の手で立ち上げたい。そう思ってテーマを立案し、ここまでやってきました。それが、私の研究者としての1つの個性だと思っています」と語る先生は、応用研究にも精力的に取り組んでいます。「フィルムや樹脂、繊維、エラストマー、発泡体、紙など、幅広い材料に金属を組み込む研究をしています。例えば繊維に金属を組み込めば、導電性を持たせることができます。最近ではセンサを内蔵した衣服『スマートウェア』なども登場していますが、その素材として活用できるでしょう。こうしたスマートテキスタイルは、高齢者の方の健康状態を遠隔でモニタリングすることに使えます。高齢化や地域の過疎化によって引き起こされる問題を解決する助けになるのではないのでしょうか。建設現場や工場の作業員の方々のバイタルデータを取得し、熱中症対策に生かすこともできると思います。また車の部品として、金属を組み込んだ樹脂が活用できると期待しています。最近では車の電装化が進み、以前は機械的に動いていた部分でも、多くが電子制御となっています。電力供給や情報伝達のために、車全体にケーブルが血管のように張り巡らされているわけです。その分、車が重くなってしまいう課題が出てきており、燃費効率に影響しています。そうした中で、軽くて柔軟な高分子材料に導電性を持たせることができれば、軽量化にも貢献できると考えています。軽くて軟らかいという点は高分子材料の大きな特徴です。そこに電子が流れる機能が加われば、車に限らずさまざまな応用可能性があるはず」

今も昔も変わらない「挑戦」の姿勢

重くて硬い金属と、軽くて軟らかい高分子材料。この2つは対極にある存在のように感じられます。先生はどのようなきっかけでこの研究を始めたのでしょうか。「もともと私の専門は高分子材料で、大学ではUV硬化樹脂（反応誘起相分離）に関する研究をしていました。そして学位を取得した後、博士研究員として海外の大学に行きまし

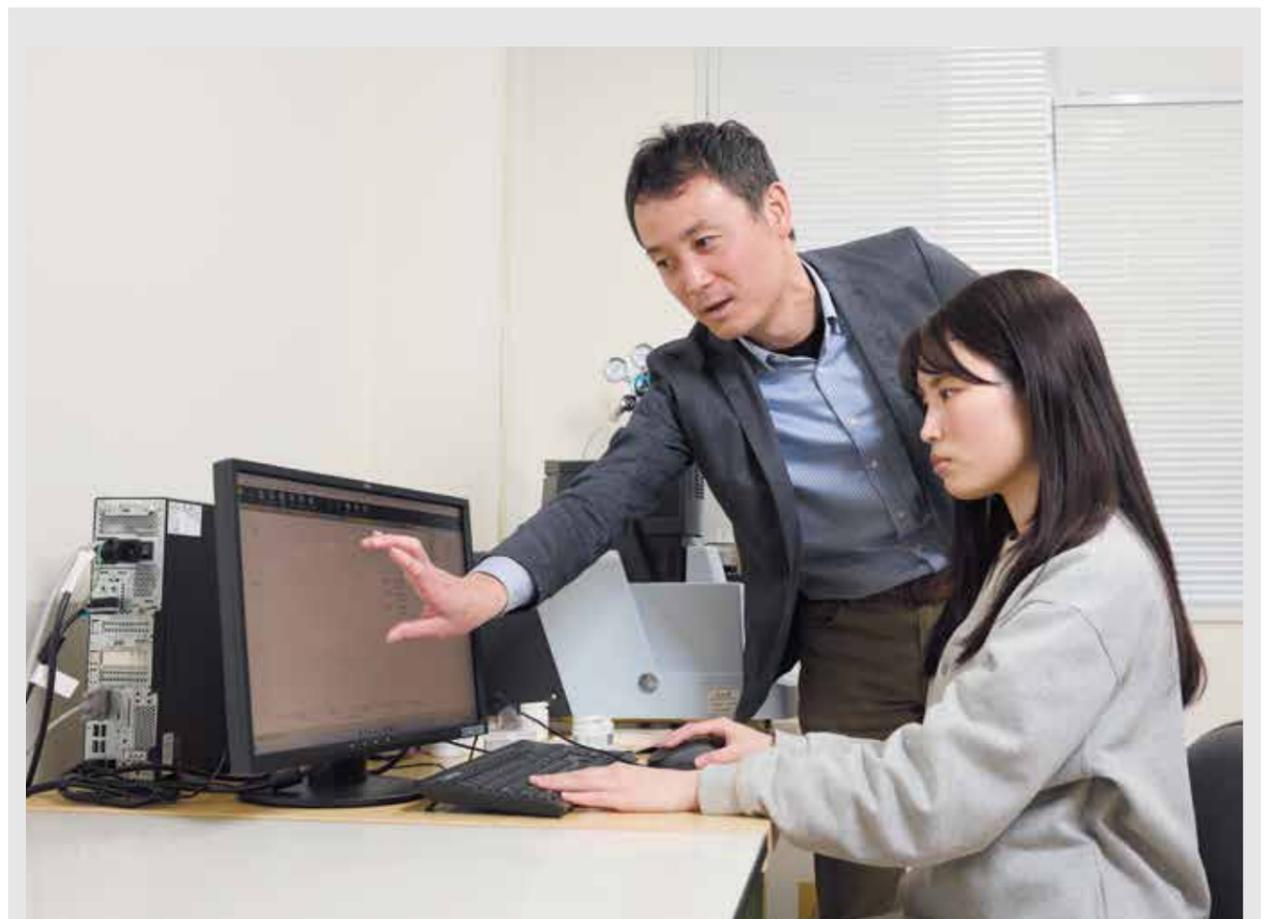


Fig.1——研究室での活動の様子

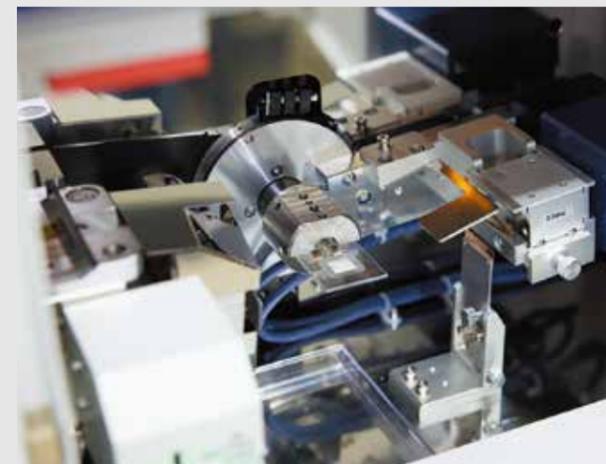


Fig.2——貴金属ナノ結晶の分析例（X線回折装置）

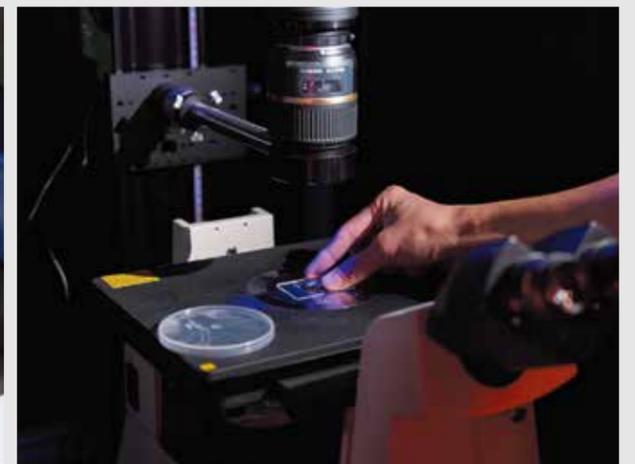


Fig.3——貴金属ナノ結晶の分析例（共焦点レーザー顕微鏡）

た。そこでお世話になった先生が、たまたま金属材料の研究をされていたのです。高分子材料と金属はまさに『水と油』。全く接点のない分野でしたが、それまでやっていた研究と組み合わせで発展させられればと思い、今の研究に着手しました。当時ホットだった研究分野からは外れていましたが、『他の人と同じことをやっても無駄だ』と自分を奮い立たせてコツコツと積み上げ、それが今につながっています」

確固たる信念を持って研究に取り組んできた中西先生。そんな先生は、どのような意識で研究室の学生たちと向き合っているのでしょうか。「工

学分野では理学分野のように、宇宙の始まりや終わりといった明確な問いが最初からあるわけではありません。工学の研究では、自分たちで問いを見つけ、課題を提起することが必要です。良い研究というのは、良い問題を作るところから始まります。そこで大切になるのが『自分で考えること』です。こうした考えは日頃から学生たちに伝えています。自分に対して言い聞かせているようなところもありますね。その意味がすぐには分からないかもしれませんが、学生たちの糧になって、卒業後元気に活躍してくれればいいですね」

最後に、今後の目標についても伺いました。「量

と質の両方を重視して論文を書いていきたいです。それに合わせて、自然と外部資金の規模が大きくなっていくような形が理想ですね。その結果、より多くの方が本学や本研究室に興味を持ってくれるといいなと思っています。企業との共同研究を増やしていくことも目標の1つ。いつか社会実装につなげていきたいです」と中西先生。そして、こう力強く締めくくってくれました。「とにかく成長し続けたいですね。『ここまでいいや』と止まってしまったらそこで終わり。現状維持ではなく、常に『揺れ動く状態』に身を置いておきたいと思っています」

デザイン史 研究室

日本のファッション デザインの 歴史を後世に 受け継ぐために



本橋弥生 准教授
[デザイン・建築学系]

【経歴】
 2003年04月-
 (独) 国立美術館
 国立新美術館設立準備室 研究員
 2006年07月-
 (独) 国立美術館 国立新美術館 研究員
 2010年04月-
 (独) 国立美術館 国立新美術館 主任研究員
 2022年04月-
 (学) 瓜生山学園 京都芸術大学 教授
 2024年04月-
 京都工芸繊維大学 准教授

【研究分野】
 ファッション・スタディーズ、ファッション史、
 デザイン史、キュレーション

研究室探訪

デザイン史
研究室

【研究概要】
 近現代のファッション文化が学術的な研究対象とされるようになったのはごく最近です。その間、多くの作品や資料が失われ、当時の状況を正確に把握することが困難な状況にあります。そこで、日本の近現代ファッション文化に関する調査を中心に、資料の収集やオーラルヒストリー記録などの取り組みを行っています。

**明治以降、洋装を取り入れながら
独自の発展を遂げてきた日本のファッション文化。
20世紀後半には高田賢三や三宅一生といった
世界的に活躍するファッションデザイナーも登場しています。
そうした歴史の記録・継承に取り組む本橋先生にお話を伺いました。**

研究から取りこぼされてきた 「ファッションの歴史」

デザイン系の研究室が集まる東2号館。その廊下を歩いていると、「高田賢三展 パリに燃ゆ、永遠の革命児」という展覧会のポスターが目に入りました。高田賢三は、「色彩の魔術師」とも呼ばれた世界的なファッションデザイナー。今回お話を伺う本橋先生先生の研究対象の1人です。この展覧会の実施にも先生は関わったといいます。そんな先生の研究テーマは「近現代ファッション文化」。研究への思いや、研究内容について聞きました。「そもそもなぜこの研究をしようと思ったのか、そこから話しますね。美術史や建築史は学問分野として確立していて、盛んに研究が行われてきました。歴史資料も美術館や博物館にしっかりアーカイブされています。でも、ファッションはなぜかその枠組みに入らず、取りこぼされてきました。日本のファッションデザイン界には世界的に活躍している人がたくさんいるにもかかわらず、そうした人たちの仕事が全くと言っていいほどアーカイブされていないのです。美術館で20年近く学芸員の仕事をしていた中でその事実が気付き、「誰かが記録して残していかなと、全てが失われてしまう」という思いで研究を始めました」。もともと大学時代には美術史を専攻していた本橋先生。ファッションが好きでこの研究を志し、大学院の社会学研究科に入り直してファッションに関する論文を書いた上で、研究に専念すべく大学教員の道に進んだと言います。

日本のファッションデザイナーの活躍を 後世にも伝えていくために

使命感に駆られ、ファッション史の研究にまい進している本橋先生。日本のファッションデザイナーの活動の軌跡を丁寧に掘り起こし、記録する活動を行っています。具体的な研究内容について、次のように話してくれました。「近年は田中千代というデザイナーの研究に力を入れていました。研究内容をまとめた『モダン・ファッションのパイオニア 田中千代』という本をこの4月に出版しています。田中千代は、1930年代初頭から1999年に亡くなるまで、日本のファッション界をけん引してきた存在でした。しかし、今ではその

名前すらほとんど知られていないというのが現状です。もともと私が好きなデザイナーは、1970年代以降に世界で活躍した高田賢三や三宅一生といった人たちです。ただ、彼らのような人たちは突然変異的に出てきたわけではありません。その前には必ず種を蒔いた人がいて、土壌を整え、育ててきた流れがあるのです。そうした積み重ねがあってこそ、ようやく花は開くものだとことを、美術史の研究を通して実感していました。だからこそ、その『前の部分』に関わった田中千代についてきちんとまとめておきたいと思ったのです」

日本のファッション史において非常に大きな存在といえる田中千代とは、いったいどのような人物だったのでしょうか。「さまざまな面で、本当にパイオニア的な存在でした。海外からモダンデザインの概念を持ち帰り、ただ西洋の真似をするのではなく、日本の環境や人に合った、本質的にクリエイティブなファッションデザインを追究しました。彼女自身がそうしたデザインを実践しただけでなく、洋裁学校を自ら立ち上げるなど、教育を通じてその考えを広めた点も先駆的でした。そうした取り組みを戦前からすでに始めていたというのは、やはりすごいことだと思います。戦後になると一気にアメリカ化が進んで洋装が広まり、洋裁学校にも生徒が殺到しました。また、デパートやアパレル企業とタッグを組んで、いち早く既成服を手掛けたのも新しい取り組みでした。さらに特筆すべきは、皇室の最初のデザイナーだったんです。昭和天皇の後であった香淳皇后の専属デザイナーとして活躍しました。そして、恐らく日本人としては初めて海外でファッションショーを開催したデザイナーでもあります。1950年にニューヨークのブルックリン美術館で『ニューキモノ』というファッションを提案しています。日本のキモノを西洋人が着る国際服にできないかと考え、イブニングドレスのように仕立てたものです。西洋の文化をそのまま日本に持ってくるというそれまでのやり方の逆を行く、非常に新しい発想でした」。数え切れないほどの業績を残した田中千代。彼女が本橋先生を惹きつけてやまない理由は、他にもあります。「彼女は西洋だけでなく、アフリカや東南アジア、南米などにも足を運び、戦前から世界各地の民族衣装を集めていました。パリのオートクチュールのような華やかなファッションだけでなく、世界中の『普通に着られている服』にも目を向け、そこ



Fig.1——ゼミの様子



Fig.2——作品 (YUKI TORII) について説明している様子

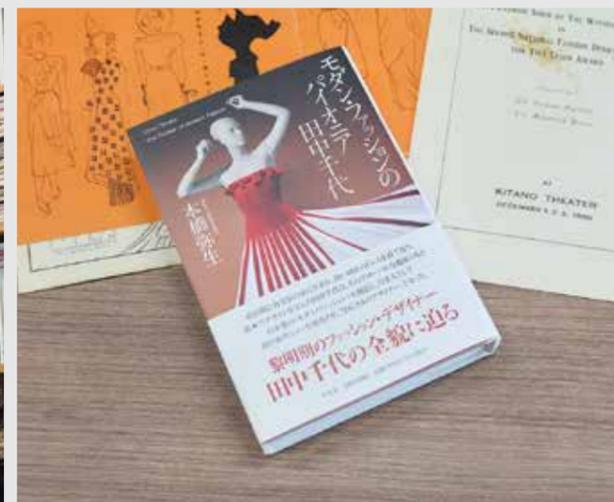


Fig.3——エフェメラ資料と書籍『モダン・ファッションのパイオニア 田中千代』

にデザインのヒントがあるはずだと考えていたんです。そうした広い視野を戦前の時代から持っていたことが、とても魅力的で面白く感じました。そんな人をいなかったことにはしたくないと思い、当時の資料を一つひとつ丁寧に集めてきました。私はもともと学芸員なので、書かれた文字だけでなく、実際にモノや資料を集め、そこからもう一度歴史を語り直すということを大切に研究を進めています。こうした研究の成果が形となったものが、先ほど話題に上った書籍『モダン・ファッションのパイオニア 田中千代』や、冒頭で触れた展覧会「高田賢三展 パリに燃ゆ、永遠の革命児」です。「高田賢三展にはキュレーターとしては関

わっていませんが、アドバイザーとしてキュレーターの方と一緒に資料を集めたり、ご遺族と一緒に仕事をしていた方に話を聞いたりして人物像をひもといていきました。その他、過去には『MIYAKE ISSEY展：三宅一生の仕事』『ファッション イン ジャパン1945-2020 流行と社会』といった展覧会に携わっています」

現物や現場、生の声に触れることが大切

先生の研究スタイルは、研究室の学生たちにも受け継がれています。学生への思いについて、最後にこう語ってくれました。「自分の目で現物や

現場を見たり、関係者に話を聞いたりすることで、世の中で言われている『通説』が本当に正しいのかどうかを疑い、自分の手で組み立て直していく。そんな姿勢を大事にしてほしいと考えています。実際に、学外のアーティストやデザイナーに話を聞きに行く機会も豊富に用意しています。特にこれからはAIの時代。AIによって作られた、誤った情報もどんどん出回ることになるでしょう。そんな時代だからこそ、自分自身が実物と出会い、そこから語るべきストーリー、ナラティブをきちんと導き出すことが、ますます重要になってくるはずです」

がんばる工織大生 | Active KIT students

令和6年度 学生の表彰

本学では、学会での受賞など学術研究活動において優秀な成績を収めた学生や、課外活動および社会活動などで活躍した学生を対象に学生表彰を実施しています。

※学年は表彰当時のものを記載しています。

学業成績優秀者 令和6年度卒業者のうち、学業において、特に優秀な成績を修めたと認められる者

所属	氏名	所属	氏名	所属	氏名
応用生物学課程 4年	蓮池 秀斗	応用化学課程 4年	吉田 武蔵	機械工学課程 4年	池永 ののか
応用化学課程 4年	井上 悠基	電子システム工学課程 4年	村中 俊介	デザイン・建築学課程 4年	川島 杏樹
応用化学課程 4年	雨池 陸大	情報工学課程 4年	塩塚 弘典	デザイン・建築学課程 4年	LEE SHAO WEE

研究業績優秀者 令和6年度修了者のうち、学術研究活動において、特に顕著な業績を挙げ、かつ、学界または社会的に高い評価を受けたと認められる者

所属	氏名	主な研究テーマ
博士前期課程 応用生物学専攻 2年	横田 夕佳	血管炎症を制御する小分子化合物の作用機序に関する研究
博士前期課程 材料創製化学専攻 2年	堀部 暁歩	酸化グラフェンの水素化分解
博士前期課程 機能物質化学専攻 2年	山本 陽大	単鎖抗体の間接配向固定を利用した高感度免疫測定法の開発
博士前期課程 電子システム工学専攻 2年	加納 大成	NドープによるVO ₂ の室温近傍での相転移実現と物性評価
博士前期課程 情報工学専攻 2年	財部 純之介	類似構造を含む1枚画像の深度マップ推定および3次元画像生成
博士前期課程 機械物理学専攻 2年	中澤 葵	焼結組織の高精度予測に向けたphase-field計算法の開発
博士前期課程 機械設計学専攻 2年	佐久間 健矢	アルミニウム合金への複合表面処理が接着接合強度に及ぼす影響
博士前期課程 先端ファイブプロ科学専攻 2年	金子 満雄	電界紡糸法とコロナ荷電法で荷電した極細繊維膜の帯電特性に関する研究
博士後期課程 物質・材料化学専攻 3年	隅田 滉史	Development of Novel Synthetic Methodology for Functional Organoarsenics and Researches on their Properties and Applications
博士後期課程 電子システム工学専攻 3年	渡邊 啓佑	Cu系金属材料の形成と元素置換による発光特性制御に関する研究
博士後期課程 設計工学専攻 3年	亀谷 憲嗣	分子動力学法によるDLC膜形成過程における残留応力発生機構の解明と密着強度への影響に関する研究

学術研究活動 令和6年度における学術研究活動において、国際的または全国的規模の学会から賞を受けた場合、社会的に高い評価を受けた場合等、特に顕著な業績を挙げたと認められる者

所属	氏名	受賞理由
博士前期課程 応用生物学専攻 1年	上西 日向子	2024年度笹川科学研究助成 採択 第47回日本分子生物学会年会 成果発表
博士前期課程 機能物質化学専攻 2年	小場 一平	国内会議発表3件 日本化学会秋季事業第14回CSJ化学フェスタ2024優秀ポスター発表賞
博士前期課程 機能物質化学専攻 1年	下村 鈴音	量子生命科学会第6回大会 Best Poster Presentation Award 日本分析化学会第84回分析化学討論会 若手ポスター賞 日本分析化学会近畿支部第18回夏季セミナー 優秀ポスター賞
博士前期課程 電子システム工学専攻 2年	坂根 頌梧	論文発表3件、論文投稿1件 The 15th Asia Lighting Conference Student Best Paper Award FIT2024 (第23回情報科学技術フォーラム) FIT論文賞
博士前期課程 機械物理学専攻 2年	池田 幸之介	国際会議発表3件、国内会議発表3件 The 30th ICCES2024 Best Poster Presentation Award 超温度場夏の学校 若手研究交流会 最優秀発表賞
博士前期課程 機械物理学専攻 1年	小林 玄征	国際会議発表1件、国内会議発表6件 日本材料学会優秀講演発表賞 日本金属学会優秀ポスター賞 日本材料学会関西支部第19回若手シンポジウム優秀発表支部長賞
博士前期課程 機械設計学専攻 1年	曾和 信宏	日本実験力学会2024年次講演会優秀講演賞
博士前期課程 デザイン学専攻 2年	田中 なつき 中野 日和 大崎 優花	2024年度グッドデザイン・ニューホープ賞 入選
博士後期課程 設計工学専攻 1年	中井 大	国際学会発表4件、国内学会発表3件、国際学術雑誌掲載2件 日本気象学会秋季大会 松野賞
博士後期課程 電子システム工学専攻 2年	小澤 桂介	第10回日本光学会年次学術講演会優秀講演賞 IEEE Photonics Kansai Chapter Student Encouragement Award

課外活動 令和6年における課外活動において、特に顕著な成績を挙げ、かつ、課外活動の振興に功績があったと認められる者

団体名	受賞理由
京都工芸繊維大学生協学生会委員会	大学と協力し、オープンキャンパス時に課程ごとのグルーブトークやディスカッション、キャンパスツアーなどを実施 「タビンチさくっとわかる本」「こーせんさくっとわかる本」などの広報誌の作成・配布 新入生・保護者向けに入学準備説明会を開催

活躍する卒業生 | Active graduates

一本松亜祐 | いっぽんまつ・あゆ | 戸田建設株式会社 建築設計統轄部 建築設計第5部(大阪駐在)



一本松亜祐

2018年度
大学院工芸科学研究科
博士前期課程
京都工芸繊維大学・チェンマイ大学
国際連携建築学専攻 修了



仕事の様子



チェンマイ大学での卒業式。お世話になった先生方と同級生

知識と経験を得た学生時代

小さいころから絵を描くことやものづくりが好きで、中学時代から自分が描いたものが形になる「建築」を将来の仕事にしたいと思うようになりました。本学を志望したのは、興味があった意匠設計(デザイン)分野において、社会で活躍するOBが多いことや在学中の先輩が学生コンペで数多くの賞を受賞している実績、そして建築だけではなく美術やデザインの授業も充実している点から、知識だけではなく社会で実際にものづくりに携わるうえで必要な“技術を身につける”という面でも興味を深められる環境があると感じたことが決め手となりました。

入学後は、大学には自分が想像していた以上の環境があり、先生方に少人数で指導いただいたアトリエやゼミ活動、友人らと夜遅くまで課題やサークル活動に取り組んだ経験、留学生との交流や海外ワークショップを通じ、多くの学びと経験を得ることができました。

中でも、タイ・チェンマイ大学とのジョイント・ディグリー・プログラムに参加できたことは自分にとって大きな転機でした。チェンマイ大学での留学期間では、言語や文化の異なる場所での設計課題やフィールドワーク、リサーチに取り組み、毎日が「新しい環境」でのインプットと、自分の考えをまとめて先生や同期と議論するアウトプットの日々で、密度の濃い時間を過ごすことができました。日本にいたときには当たり前感じていた建築の仕組みやまちの構成には理由があることを肌で感じられたことは大きな経験になりました。

学生時代の経験が人生の糧に

就職先を選ぶ際、建築設計だけでなく工事も含めた社内チームで建物の完成まで携われるゼネコンの仕事に惹かれたことから現在の会社に入社しました。

建築設計の仕事はどのプロジェクトも同じものはなく、新たな課題に挑戦しながらアイデアを形にしていく日々です。

建物が作り上げられる過程は喜びも大きい反面、努力して作り上げた案が最終的に採用されないことも少なくありません。プロジェクトを推進するためには、どんな時でも思考を切り替え次につなげるために手を動かすことが大切です。

そのときに大学時代の「アウトプットしてきた経験」が支えになっています。大学では、悩んだ時に手を動かすための起点になる思考のきっかけを先生方や先輩から、また目標に向かい努力する姿勢を切磋琢磨してきた友人から学び、それらをアウトプットする課題やワークショップなどさまざまな機会を持つことができました。そういった一歩先への進み方を学び、経験できたことが今の自分の糧となっています。

自分の可能性を広げるために

先輩の皆さんには、自分の可能性を広げるため、興味があることには勇気をもってぜひ一歩を踏み出し、何事にも挑戦してほしいです。新しいことをインプットすることは広い視点を持つきっかけになりますし、目標に向かって全力で取り組んだ経験は、自分にとって大きな糧になります。

私にとってはチェンマイ大学とジョイント・ディグリー・プログラムを行う国際連携建築学専攻へ進んだことが1つの挑戦でした。当時始まったばかりで前例のなかった専攻でしたがここで手を挙げないと後悔する、と思い飛び込んでみたことでかけがえない経験を得ることができました。先生方や大学が挑戦をバックアップしてくださる環境があったからこそ、思い切って進むことができたと感じます。

京都工芸繊維大学は、さまざまなことに触れられ、自分の知見を深められる環境と、それを深め表現できる場があり、新しい挑戦を応援してくれる大学です。大学生活の中で、ぜひその一歩を踏み出してみてください。

その経験が、仕事を前に進める力に直結している。インプットとアウトプットを繰り返した大学時代。

アール・デコ博100年

平芳幸浩（デザイン・建築学系 教授 美術工芸資料館 館長）

今年2025年は昭和百年ということで、世間は昭和回顧で賑やかであるが、アール・デコという名称の元となったと言われる博覧会「現代国際産業装飾美術博覧会 Exposition internationale des arts décoratifs et industriels modernes」がパリで開催されたのもちょうど100年前の1925年のことであった。

この博覧会は、1925年4月28日から11月8日までパリ中心部で開催された。アンヴァリッドからアレクサンドル三世橋、そこからグラン・パレとプティ・パレまでが会場となる大規模なもので、19世紀までの手工業的生産から近代的機械生産への転換を図るべくデザイン面の革新を打ち出し、フランスの産業芸術と装飾芸術の振興（国際的優位）が目指された。博覧会のほとんどはパリの有名百貨店をはじめとする自国内の企業・団体によるパビリオンであったが、ヨーロッパを中心に21カ国が参加し、そのうち17カ国がパビリオンを建てて自国文化・産業の紹介を行った。

この博覧会がアール・デコの始まりとされるのは、幾何学的な線や形態を基本としたデザインが主流を占めたからであるが、この博覧会では、ル・コルビュジェのエスプリ・ヌーヴォー・パビリオンに代表されるような装飾性を排したモダン・デザインと、過剰に混濁的な装飾性を示すアール・デコ・デザインがぶつかり合っていた。デザイン史的な流れとしては、普遍主義的な構成主義モダン・デザインに対して局所的な意匠のパッチワークでもあるアール・デコは敗北し、再評価の機運が高まるのは1960年代以降まで待たなければならぬ。

工業の力の融合を謳うかのようにであり、ブルデルのポスターに記された「勤労と叡智によって『par labour et par genie』」とも呼応している。ジラルルのデザインには、多様な煙突の羅列による三角構図、中央部分の上昇する動きと垂線の強調、全体のシンメトリーなどにアール・デコ的なものが感じられるのも確かである。1901年生まれたジラルルは当時まだキャリアを積み始めたばかりで、アール・デコ的な表現を取り込みつつ独自のスタイルを模索している時期であったのかもしれない。同じく工場をモチーフとした作画を行ったシャルル・ルポ（Charles Loupot, 1892・1962）は、アール・デコを代表するデザイナーのひとりと言われるようになっていく。この博覧会ポスター（図3）においても太く素早い描線で対象を簡潔に捉えるルポらしい表現が見て取れる。それでもなお、中間色の淡い色遣いや色面のエッジの揺らぎなど、アール・デコのグラフィック・デザインが未だ確立されてはいない雰囲気も漂わせていると言えよう。

この博覧会の組織委員会にも参加していたロベール・ボンフィス（Robert Bonfils, 1886・1972）がデザインしたポスター（図4）は他の3点と違ってハッキリと図案化されているのが見て取れる。使用されている色は赤と黒の2色のみ、花籠を担ぐ女性と背景は赤一色で刷られ、ガゼル（サバンナやステップに生息するウシ科の草食動物）のみが黒く塗られることでコントラストが際立つようにデザインされている（刷り色を代えて青と黒の2色という組み合わせもあったようだ）。花の部分にハッチングが用いられている以外は陰影表現はほぼ省略され、花籠、女性の胴体、下草へと大きな半円が反復する。花籠の中の薔薇が、博覧会のアイコンであったこと以外どこからモチーフが取られてきたのかは不明であるが、ギリシャのアンフォラの人物表現などの影響も想起させる意味では、古い時代の異文化からの引用というアール・デコの特徴を持っていると見ることができると言える。

興味深いのは当時の装飾的なデザイン様式が博覧会の名称からアール・デコとされて一般に流布するようになるのも1960年代後半のことであるということだ。つまり博覧会はアール・デコ様式を戦略的に打ち出したわけでも、ひとつの名前で括ろうとも思っていないのであり（そもそもアール・デコという名前には装飾芸術という意味しかない）、当時流行していた様々な意匠の総称として後付けられた名前ではないのである。それゆえ、アール・デコはその始まりを示す歴史的な作品（商品？）のようなものも存在しない。アール・デコ博は、アール・デコが始まった起源ではなく、アール・デコが「発見された」場なのである。

ここで紹介するアール・デコ博のポスターも、そのような状況を物語っていると見えよう。ポスターのデザインが、明確にアール・デコと呼べるよう一定の傾向を示してはいないのである。博覧会のために制作されたポスターは4種、それぞれ異なるデザイナー（芸術家）によるものである。作画を手掛けた四人のうち最年長で当時最も著名であったのはエミール・アントワヌ・ブルデル（Emile Antoine Bourdelle, 1861・1929）である。彼は元来彫刻家であるが、ここで描かれた雄牛と羽根の生えた狩人（図1）はアール・ヌーヴォー期にすでに見られる簡略化平板化された対象表現ではなく、アカデミックな絵画表現によって表されている。同様に陰影による立体表現が用いられているのは、アンドレ・ジラルル（André Girard, 1901・1968）による群像描写である（図2）。噴煙を上げる工場の煙突を背景に杯を高く掲げる様は人間の叡智と

エジプトやギリシャ、日本を含むアジアなどの異文化からの裝飾的引用というアール・デコの特徴が両大戦間のヨーロッパ諸国の帝国主義を反映したものであることも触れておこう。この博覧会は、フランスのみならず、ヨーロッパから参加した各国（全てではない）が植民地の風物や伝統工芸を紹介する場ともなっていた。そこにあられるエギゾチックな趣味（異国情緒）がもてはやされ建築装飾やグラフィック・デザインへと展開していくことになるのである。異国の伝統的な表現を近代産業のデザインとして積極的に採用するアール・デコとは、多様な文脈を横断する点でポストモダンのとも評されるが、その裏側には植民地の文化を吸収し自国の文化と同化させる侵略的側面を併せ持っていることを見逃してはならない。

ちなみに、日本はこの博覧会にパビリオンを建てて数多くの工芸品を展示している。その詳細は日本産業協会がまとめた『巴里萬國装飾美術工芸博覧会日本産業協会事務報告書』に詳しいが、残念ながらヨーロッパのデザイン潮流とはかけ離れた前近代的な姿を提示したようである。瓦屋根の日本家屋をパビリオンとして建設し、その室内に伝統的な工法と装飾パターンによる工芸品が統一感なく並べられた。その結果、日本の工芸とヨーロッパのデザインとの落差は衝撃的なほど大きく、当時ヨーロッパに留学中でアール・デコ博の国際審査員も務めていた津田信夫は帰国後に工芸改革を進めていくことになる。この博覧会での失敗の反省から日本の工芸とデザインの近代化が実を結んでいくことになるのである。



図1
ブルデル、エミール・アントワヌ（現代国際産業装飾美術博覧会1925年）
1925、AN.209+46

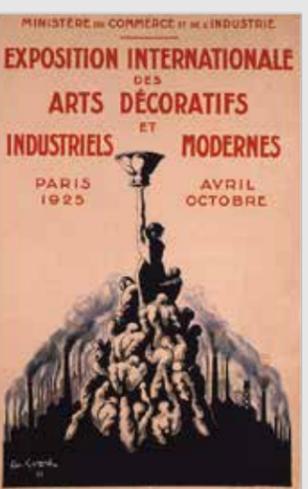


図2
ジラルル、アンドレ（現代国際産業装飾美術博覧会1925年）
1925、AN.209+45

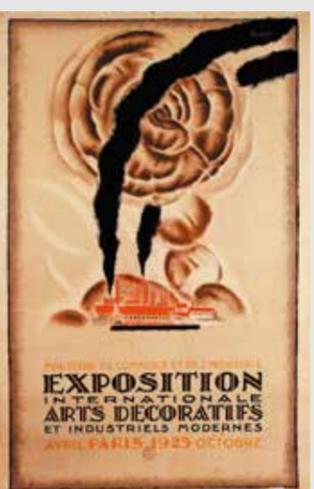


図3
ルポ、シャルル（現代国際産業装飾美術博覧会1925年）
1925、AN.209+44



図4
ボンフィス、ロベール（現代国際産業装飾美術博覧会1925年）
1925、AN.209+43

寄附報告

京都工芸繊維大学基金への

ご協力に心より

御礼申し上げます。

本学では、皆様からのご支援により、
学生・教員への支援助成などの基金事業を実施しております。
 令和6年度は、72の個人および法人・団体様からご支援いただき、
その総額は18,016,681円に達しました。
皆様から多大なご理解・ご協力を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。
本ページでは、昨年度実施した事業をご報告いたします。

寄附者ご芳名

※お名前の公表をご了承いただいた方のみ50音順に掲載させていただいております

浅野 公允	奥村 滋夫	小谷 英治	平松 良夫
安藤 繁	株式会社建築資料研究社/日建学院	小林 照男	福井 則夫
市川 直樹	柏木 邦夫	榊原 敏之	福田金属箔粉工業株式会社
井上 昭生	株式会社総合資格	杉田 幹子	藤原 貞道
植田 勝裕	河藤 誠一	鈴江 登	水野 拓未
梅本 益雄	川端 宗成	高木 裕一	村瀬 秀典
榎川 諭	京工大機織会（マコーン会）	竹田 慈明	森迫 清貴
遠城 弘昌	京都工芸繊維大学同窓会	中島 將雄	山本 貴幸
円満字 洋介	クシゼミ卒業生一同	中田 侑甫	吉永 滝雄
沖 祐治	河野 雄二郎	西村 太良	

ほか33名

ご寄附のお申込みについて

本学ホームページよりお申込みいただけます。
 また、クレジットカード、コンビニ決済、ネットバンキングでのお申込みも受け付けております。
 皆様のさらなるご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

お申込み・お問い合わせ先
 京都工芸繊維大学財務課財務企画係
 Tel:075-724-7045 E-mail:kitkikin@jim.kit.ac.jp



https://www.kit.ac.jp/fund_index/

令和6年度 基金事業

1. 人材育成基金事業

KIT基金奨学生

大学院博士課程の優秀な学生を対象に奨学金を給付し、研究者として優れた人材の育成を図りました。令和6年度は1名を採用し、100万円を支給しました。

採用者 建築学専攻 1名

事業費 1,000,000円



2. 国際交流支援事業

海外短期語学研修支援

夏季および春季休業期間に約5週間、アイルランド・ユニバーシティカレッジダブリンおよび豪州ヴィクトリア大学に学生を派遣し、語学研修を実施するための参加費の一部を支援し、参加学生の英語能力の向上と国際的視野の拡大を図りました。

事業費 400,000円



3. 広報活動基金事業

美術工芸資料館カレンダー・ミュージアムグッズ作成

学内外との交流の促進に寄与するため、美術工芸資料館所蔵資料によるカレンダーを作成し、入試広報や就職支援に用いるとともに、同窓会や地域との交流活動に活用しました。また、トートバッグや手ぬぐい等の美術工芸資料館ミュージアムグッズを制作し、ご寄附いただいた方にも贈呈いたしました。

事業費 1,200,000円



4. 指定基金事業

KIT同窓会・KIT若手研究者支援プロジェクト

同窓会からのご寄附により、挑戦的で独創性に富んだ発想の研究を行う若手研究者に支援を行いました。令和6年度は、繊維学系・丸林弘典准教授に対して100万円の研究費を支給しました。

研究テーマ 超高压誘起相転移を利用したバイオプラスチックの構造物性開拓と極限物性

事業費 1,000,000円



繊維アーカイブ作成プロジェクト

衣笠同窓会みらい基金からのご寄附により、京都工芸繊維大学の前身校のひとつである京都蚕業講習所以来、本学内に所蔵されている蚕糸・繊維関係資料を調査し、詳細に把握できるようアーカイブの構築を行っています。令和6年度は、本学60周年記念館にてシンポジウム「久米島紬と蚕業—無形文化財の保存・活用と展望」を開催しました。

事業費 3,000,000円



海外留学及び若手研究者支援事業

衣笠同窓会みらい基金からのご寄附により、学生の海外派遣奨学金や、学術論文投稿支援事業等の既存事業へ当基金から支援を行っています。令和6年度はそれぞれの事業に計150万円を支給しました。

事業費 10,000,000円



吉永滝雄指定基金事業

意匠工芸学科卒業生（S47卒）からのご寄附により、デザイン科学域博士後期課程学生の研究環境整備等を行っています。令和6年度は100万円を追加でご寄附いただき、イカロス基金と銘打ち、伝統工芸である京組紐を応用した生活用品の制作や、学会での発表、研究室合同の展覧会の開催など、デザイン系学生の多様な活動の支援を行っています。現在も、自主特撮映画の制作をはじめとするプロジェクトが進行中です。

事業費 10,000,000円



5. 修学支援基金事業

奨学金・留学支援事業

経済的理由により修学が困難な学生の留学や海外インターンシップを支援するために、奨学金を支給しました。令和6年度は、37名に対して一時金として5万円ずつ支給しました。

事業費 1,850,000円

文部科学省「大学の世界展開力強化事業」採択事業

JoinTECH Laboratoryプログラム

3×3教育制度の活用によるグローバルな次世代マテリアル人材育成プログラム

大学の世界展開力強化事業とは 文部科学省による、国際的に活躍できるグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力の強化を目指した事業で、2024年度は「EU諸国等との大学間交流形成支援」をテーマに公募が行われ、本学の申請事業が採択されました。

Point 1 ヨーロッパ6大学との連携により、共同研究をベースとしたJoinTECH Laboratoryを設置

ヨーロッパの連携大学との共同研究をベースに、オンライン交流と海外留学を組み合わせた実践的な専門教育を段階的に実施します。

Point 2 修士学生の個別の専門分野の研究に基づいた一貫した交流プログラムを実現

学生は自大学での研究を途切れさせることなく、留学先の研究室で研究を継続することができます。異なる思考や手法による研究に触れることで、視野を広げ、多様な研究者やラボメイトと人脈を作ります。

Point 3 次世代マテリアル分野を牽引するマテリアル TECH LEADERを創出

半導体材料をはじめとする高機能・最先端のマテリアル分野で、主体的に開発と探求を行い、イノベーションを牽引する人材を育成します。

プログラム概念図

1 JoinTECH-Online

海外協働の土台作り

- オンライン交流による留学障壁の低減
- JV-Campus によるお試しラボにより、専門分野の適性見極めや早期からの研究留学の計画が可能に

4 JoinTECH-Seminar

世界の最先端とつながる

- 毎年度1回開催
- ラボ間での知見の共有
- 異なる分野間でのネットワーキング



2 JoinTECH-Visit

グローバルなチーム協働体験

- 1～2週間ほどのグループ派遣・受入
- 現地学生とプロジェクトを通じて協働
- 長期留学への意欲喚起

3 JoinTECH-Lab

修士論文等に反映される科学的な成果

- 数か月間～の派遣・受入
- 連携研究室と共に成果を伴う共同研究を実施

JoinTECH-Seminar 2025を開催します

日時 2025年11月18日 [火]～19日 [水] 17:00-19:00

場所 本学 60周年記念館 / オンラインのハイブリッド開催

テーマ TECH LEADERS Ready for a Complex World
～ JoinTECH Laboratories and the Power of Borderless Innovation ～

概要 複雑化する世界で求められる理工系人材「TECH LEADER」とはどのような人材か。そのために求められる教育プログラムとは何か。JoinTECH Laboratoryプログラムはこれらの問いに挑戦します。第1回となる本セミナーでは、日欧のプログラム参加学生の報告を踏まえ、プログラムの可能性を考えます。

セミナーの詳細はこちら



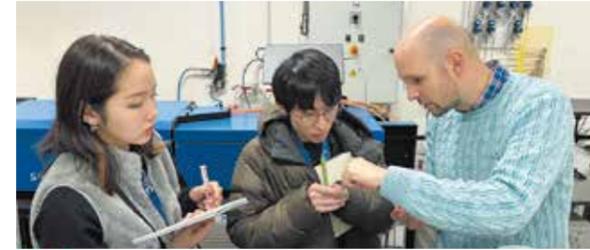
<https://www.kit.ac.jp/events/events251118/>

本事業で連携する海外相手大学

オルレアン大学
University of Orléans
(フランス)



連携分野：半導体プラズマプロセス
担当教員：電気電子工学系 高橋和生教授



ベニス大学カ・フォスカリ校
Ca' Foscari University of Venice
(イタリア)



連携分野：バイオ・ナノテクノロジー、生体分子工学
担当教員：分子化学系 熊田陽一教授



リュブリャナ大学
University of Ljubljana
(スロベニア)



連携分野：バイオインターフェース設計、バイオセパレーション
担当教員：分子化学系 熊田陽一教授



学生体験談：中戸志穂（機能物質化学専攻 修士1年） 派遣

留学先のリュブリャナ大学では自分の研究テーマを発展させた内容を学んでおり、自分自身の成長を感じられて、毎日がとても充実しています。言語の壁に直面する時もありますが、それもひとつの刺激となり、人生における最高の思い出になると確信しています。生活していると文化の違いにも直面します。日本と異なり戸惑うことが多々ありますが、それも特別な経験です。私がこの留学で一番感じたことは、自分の意見を述べようとする前向きな姿勢が必要であるということです。勉学以外にも多くのことを学べる留学は、本当に自分の良き財産となります。このような素晴らしい機会を与えてくださった熊田先生を始め、快く受け入れてくださったProf. Aleš Podgornik、研究室の方々、手厚いサポートをしてくださった国際課の皆様にご心より感謝申し上げます。

ウーディネ大学
University of Udine
(イタリア)



連携分野：材料科学、冶金工学
担当教員：材料化学系 Elia MARIN准教授



トゥウェンテ大学
University of Twente
(オランダ)



連携分野：ナノ光電子工学
担当教員：電気電子工学系 高橋駿准教授



バレンシア大学
University of València
(スペイン)



連携分野：半導体工学
担当教員：電気電子工学系 西中浩之教授



学生体験談：Pau Hostalet (Faculty of Physics 修士1年) 受入

工織大への留学で楽しみにしていたのは、結晶成長や評価の分野で新しい技術を学ぶこと、特にMist CVD法について理解を深めること、そして工織大の方々とのアイデアを交換することでした。研究グループの皆さんは非常に親切で、基板の洗浄、装置の立ち上げ、Mist CVD法による成膜、さらにはX線回折や電子顕微鏡を使った高度な評価技術に至るまで、研究のあらゆる工程を丁寧に教えてくれました。指導教員の先生方から直接学び、疑問点を話し合うことは、実践的なスキルと新しい視点の両方を得るうえで非常に貴重な経験となっています。休日には京都の名所や風景を楽しんでいますが、伝統・革新・自然が見事に調和したこの街に、私はすっかり魅了されました。京都は、その文化的な美しさだけでなく、ここで築いた温かな人間関係によっても私の心に特別な場所として刻まれることでしょう。

令和7年度 京都工芸繊維大学 入学宣誓式を 挙りました

2025年4月7日[月]

2025年4月7日(月)、京都コンサートホールにて令和7年度入学宣誓式を挙りました。当日は天候にも恵まれ、晴天が広がる中、工芸学部および工芸科学研究科(博士前期課程・博士後期課程)の新入生を迎えました。

吉本昌広学長は祝辞の中で、本学を象徴する3つの理念である「ART×SCIENCE」「LOCAL×GLOBAL」「TRADITION×INNOVATION」について触れるとともに、



人工知能と人間を比較し、全く予想のつかない突発的な状況や、おおもとの前提条件が崩れるような状況でも判断できる人間ならではの力を、さまざまな人との交流により養ってほしいと語りました。

その後、学部・大学院博士前期課程、同後期課程の各代表の学生が学業に一生懸命励むことを力強く宣誓しました。

本学ロボコン挑戦 プロジェクト チームが 「NHK学生ロボコン 2025」に出場し、 ローム株式会社の 特別賞を受賞しました

2025年6月8日[日]

2025年6月8日(日)、ABUアジア・太平洋ロボコン代表をかけた選考会が、東京都大田区総合体育館で行われ、本学ロボコンチームForteFibre(フォルティファイブ)が出場しました。

NHK学生ロボコンは、日本全国の大学や高等専門学校が参加するロボットコンテストとして1991年から始まったもので、今回は事前審査を通過した17チームが出場しました。

NHK学生ロボコンでは毎年競技テーマが設定され、それに基づいたルールで各団体が競い合います。今年の競技テーマは「『ロボットバスケットボール』"ROBOT BASKET-BALL"」で、バスケットボールにヒントを得た競技となっており、2台のロボットで構成されたチームが、オフENSEスやディフェンスを行い、得点を競います。



本学チームは、予選リーグで、電気通信大学と大阪工業大学と対戦しました。

電気通信大学との1戦目では、両チームが堅い守りを見せ、互いに得点を許さないまま0対0の引き分けとなりましたが、シュートを行った回数により本学チームが勝利を収めました。

大阪工業大学との2戦目では、本学チームの1台のロボットに不調を抱えながらも残る1台で健闘を見せましたが、ファウルによる失点で惜しくも決勝トーナメント進出を逃しました。

残念ながら予選リーグ敗退となりましたが、本物のバスケットのようなディフェンスを評価され、ローム株式会社の特別賞を受賞することができました。



学生による 「ミニコンサート」を 開催しました

2025年6月13日[金]

2025年6月13日(金)、美術工芸資料館1階ホールにおいて、学生による「ミニコンサート」を開催しました。

このミニコンサートは美術工芸資料館で開催された「海をゆく建築 -村野藤吾と本野精吾の船室デザイン」展の関連イベントとして企画されました。

京都三大学合同交響楽団OB会の竹内紘さん(デザイン学専攻 博士前期課程1年次)、竹迫茉優さん(京都府立大学 博士前期課程1年次)、藤井智矢さん(応用化学課程3年次)、矢田大地さん(京都大学4年次)による弦楽四重奏で、Jacques Offenbachの「ホフマンの舟歌」のほか、開催中の

展示会をイメージした4曲が演奏されました。

当日は、ホールに響き渡る演奏に聴き入る来場者であふれ、大盛況のうちに終了しました。



当日の様子

令和7年度 京都工芸繊維大学 創立記念日事業 講演会において、 未来デザイン・ 工学機構の 活動紹介を 行いました

CPF News

未来デザイン・工学機構
(Center for the Possible
Futures : CPF) の
活動を発信します。

2025年5月16日(金)、本学創立記念日事業講演会において、未来デザイン・工学機構(以下、CPF)の各ラボ・センターにおける活動紹介を行いました。当日は本学教員、学生、同窓会、産学連携協力会会員企業等を含め94名が参加しました。

講演では、初めに、未来デザイン・工学機構長である私、山下兼一よりCPFの全体活動紹介として、学内のさまざまな研究分野の教員が、分野の枠組みを超えて未来を妄想する場として設置した「KYOTO AGORA」におけるこれまでの活動内容の紹介を行いました。その後、6つのラボ・センターより活動紹介が行われました。

KYOTO Design Labラボ長 Erwin Viray教授からは、活動紹介として、スイス連邦工科大学ローザンス校と共同で実施したデジタル技術による寺院の再構築と持続可能性を探るワークショップでの取り組みや、岐阜大仏および大仏殿を3Dスキャンにより実測・分析し、保存修理するプロジェクトなどの事例紹介がありました。

次に、京都グリーンラボ長 小林和淑教授からは、ラボのミッションおよび構成メンバーの紹介があり、その後、ラボ長の小林教授がプロジェクトマネージャーを務めるムーンショット目標6の研究課題であり、本ラボの主たるミッションである「スケラブルな高集積量子誤り訂正システムの開発」の研究概要の説明と関連イベントの案内がありました。

新素材イノベーションラボ長 中健介教授からは、センターの活動紹介として、次世代をけん引する力ある教員の育成を

目指す分野融合スタートアップ支援や、産学連携の試みとして、ラボの施設を利用して他大学や企業とさまざまな研究を共同で行う産学共創活動の例などが紹介されました。

続いて、社会医工学研究センター長 野村真教授より、今年4月から新たに設置された本センターのコンセプトの説明があったあと、本センターの構成員として、生物学、材料・分子化学、繊維学、情報、デザイン、電気電子など、多彩な分野の教員が紹介されました。

繊維科学センター副センター長 岡久陽子准教授からは、活動方針と構成メンバーの紹介があったあと、センターが実施する国際交流事業として、繊維大学の世界的なネットワークであるAUTEX会議への出席や、繊維学サマースクールなどの取り組みが紹介されました。また今年度実施予定の繊維技術に関するリカレント教育や北陸ヤーンフェアへの出展、講演会の案内などがありました。

最後に、高性能シミュレーション研究センター長 高木知弘教授から、今年4月に新たに設置された本センターの目的や組織構成の説明があり、その後、本センターが取り組む「流体シミュレーション」「材料シミュレーション」「大規模シミュレーション」の3つの研究分野についての説明と今後のセンターの取り組み内容が共有されました。

今後もこれらの活動を通じて、それぞれの専門性を生かし、研究力を強化するとともに、分野の枠組みを超えて活動できる拠点として発展していきます。

(未来デザイン・工学機構長 山下兼一)



1



2

1：ラボ・センターからの活動紹介

2：「KYOTO AGORA」における異分野同士の教員によるディスカッション

入試に関する最新情報について

本学の教育・入試情報を知っていただく機会として、各地で開催される進学ガイダンスにブース参加、資料参加を行っています。ブース参加を行うガイダンスの一覧は、以下に掲載し、随時更新しますので、お近くの会場で開催される際はぜひお越しください。



<https://ac.web.kit.ac.jp/02/nyushi/gakubu/guidance.pdf>

その他、ミニ講義動画をはじめ、受験生の方にご覧いただきたい情報を以下に掲載しておりますので、こちらもぜひご確認ください。



https://www.kit.ac.jp/test_index/

令和8年度（令和7年度実施）入学試験関係日程表 | 学部

入試種別	出願受付期間	試験実施日	合格者発表日	入学手続期間
ダビンチ入試（総合型選抜）	9月1日〔月〕～9月8日〔月〕	第1次選考 10月4日〔土〕 ----- 最終選考 11月8日〔土〕	10月22日〔水〕 11月19日〔水〕	11月20日〔木〕～11月26日〔水〕
学校推薦型選抜（一般プログラム） （地域創生Tech Program）	1月21日〔水〕～1月28日〔水〕	-	2月10日〔火〕	2月12日〔木〕～2月18日〔水〕
一般選抜	前期日程 1月26日〔月〕～2月4日〔水〕	2月25日〔水〕 / 26日〔木〕	3月9日〔月〕	3月10日〔火〕～3月15日〔日〕

詳細は各募集要項にて確認してください。

令和8年度（令和7年度実施）入学試験関係日程表 | 大学院

入試種別	出願受付期間	試験実施日	合格者発表日	入学手続期間
博士前期課程（修士課程） 一般	第Ⅱ期 9月9日〔火〕～9月16日〔火〕 （資格認定申請締切 7月25日〔金〕）	10月11日〔土〕	10月22日〔水〕	11月20日〔木〕～11月26日〔水〕
	第Ⅲ期 11月4日〔火〕～11月11日〔火〕 （資格認定申請締切 10月1日〔水〕）	12月6日〔土〕	12月17日〔水〕	2月12日〔木〕～2月18日〔水〕
博士前期課程（修士課程） 社会人	第Ⅱ期 11月4日〔火〕～11月11日〔火〕 （資格認定申請締切 10月1日〔水〕）	12月6日〔土〕	12月17日〔水〕	2月12日〔木〕～2月18日〔水〕
博士前期課程（修士課程） 外国人留学生	11月4日〔火〕～11月11日〔火〕 （資格認定申請締切 10月1日〔水〕）	12月6日〔土〕	12月17日〔水〕	2月12日〔木〕～2月18日〔水〕
博士後期課程 一般/社会人	第Ⅱ期 11月4日〔火〕～11月11日〔火〕 （資格認定申請締切 10月1日〔水〕）	12月6日〔土〕	12月17日〔水〕	2月12日〔木〕～2月18日〔水〕
博士後期課程 外国人留学生	11月4日〔火〕～11月11日〔火〕 （資格認定申請締切 10月1日〔水〕）	12月6日〔土〕	12月17日〔水〕	2月12日〔木〕～2月18日〔水〕

詳細は各募集要項にて確認してください。

美術工芸資料館展覧会

開催期間	展覧会名等
7月28日〔月〕～9月20日〔土〕	大阪・関西万博開催記念「工芸と京都—近世から近代へ」
7月28日〔月〕～9月20日〔土〕	博物館実習成果展「日本を駆ける近代の風 暮らしのデザイン、魅せるデザイン」
10月3日〔金〕～10月25日〔土〕	SDレビュー 2025 第43回建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展 京都展

※会期・内容は変更となる場合がございます。事前に美術工芸資料館ホームページでご確認をお願いします。

8月以降の主なイベント

開催日	イベント	参加費	参加申込の必要	問い合わせ先	会場
8月8日〔金〕 / 9日〔土〕	オープンキャンパス2025	無料	有 （一部予約不要の プログラムあり）	総務企画課広報係 TEL：075-724-7016 E-mail: kit_oc@jim.kit.ac.jp	松ヶ崎キャンパス

※詳細情報、申込方法はホームページでご確認をお願いします。

大学公式SNS

日々更新中です。ぜひご覧ください。

[X (旧Twitter)]



[Facebook]



[LINE]



KITnews Vol.69

[編集/発行] 発行日: 2025年7月29日〔火〕

国立大学法人京都工芸繊維大学

〒606-8585京都市左京区松ヶ崎橋上町

TEL | 075-724-7016

FAX | 075-724-7029

URL | <https://www.kit.ac.jp/>

表紙写真はセンターホールの

外壁ガラスに映る木々です。

キャンパスの豊かな緑に囲まれたセンターホールは

2024年度にリニューアル工事を行い、

外壁の補修やバリアフリー化、照明・空調の更新により、

末永く快適に使っていただける建物へと

生まれ変わりました。

表紙裏P1-2の写真は、

オープンファシリティセンターの分析機器などが

多く集まる13号館の外観です。

設備メンテナンス時などに大型機器の搬入に使用する

バルコニーが備え付けられており、

縦に伸びるルーバーは、ドラフトチャンバー用の

ダクトを隠す役割も兼ねています。

© 2025 Kyoto Institute of Technology

All Rights Reserved

KITnewsをお読みいただき、ありがとうございました。

今後のKITnewsの改善・充実を図るため、

右記URLまたはQRコードより

アンケートへのご協力をお願いいたします。

（回答期限 2025年10月31日〔金〕）



https://www.kit.ac.jp/kitnews_anketo/



